

# 令和7年度白滝ジオパーク研究助成報告書

早稲田大学 文学研究科 考古学コース

博士後期課程3年 北村成世

研究課題名「白滝遺跡群の有茎尖頭器石器群の再検討」

## 1. 研究の現状と課題

有茎尖頭器とは、茎部が施された尖頭器であり、北海道では多様な細石刃石器群とともに確認される。北海道の有茎尖頭器研究は、その機能や技術的位置付けに関して注目され、本州有茎尖頭器石器群との関連性や編年・年代を調べる試みが進められてきた。

しかし、北海道有茎尖頭器石器群の編年や変遷過程は、研究者間で明確な見解の一致が見られず、明らかでない部分も多い。白滝遺跡群や千歳市周辺の En-a 層関連出土成果から、その年代的な位置付けは更新世末期に比定されているものの、その詳細が明らかでないのが現状である。近年では、帯広市空港南 A 遺跡の調査成果によって、想定よりもはるかに古い編年・年代観が指摘されており、改めて有茎尖頭器石器群の見直しを図る必要がある。有茎尖頭器石器群は、主に有茎尖頭器の形態によって変遷を検討されてきたが、北海道から出土する有茎尖頭器は多様な形態を持つため、この視点からの検討は困難が予想される。

## 2. 本研究の目的（図1）

本研究では、有茎尖頭器の編年・年代観の検討を進めるために、形態に囚われない新たな視点を構築することにある。具体的には、有茎尖頭器に共伴する他の石器、つまり彫器やスクレイパー、石刃類などの比較から有茎尖頭器を区分することが目的である。また、質・量ともに良好な資料が出土している白滝遺跡群の資料の観察を通じ、技術的・機能的な多様性を包括的に把握するための視座を提供する契機としたい。

## 3. 本研究の方法

上白滝2遺跡、奥白滝1遺跡、服部台2遺跡などの有茎尖頭器石器群関連資料に対し、彫器・スクレイパー・石刃などの主要石器の形態、製作の過程、製作技術に着目する。これらの要素から、従来一括とされてきた有茎尖頭器石器群の中で異なる特徴を抽出する。

また、3D スキャナーを使用し、これまで行われてこなかった立体的な検討を行うためのデータ取得を行った。

## 4. 本研究の成果

### 4-1. 主要石器について

各遺跡の彫器、スクレイパー、石刃などを実見した。石刃素材主体のこれらの石器は、有茎尖頭器の製作とは流れを異にしている可能性があることが分かった。これらの形態は予想以上に柔軟で、更に多くの遺跡出土資料を実見する必要があると考えている。

当時の狩猟採集民は、大きく二種類の剥離技術を柔軟に使い分けていた可能性を指摘できる。これは、石刃剥離技術である細石刃石器群と主に剥片剥離技術である有茎尖頭器石器群が組み合わさり、これが年代ごとに段階で変化するか、独立して変化していくのか、新たに検討しなければならない。

### 4-2. 3D計測とその活用について（図2）

16点の有茎尖頭器及びその関連資料を測定した。報告者は2025年中に帯広市の有茎尖頭器に対し、コンピューター上で3Dデータを用い応力の計算を主とした分析（FEM分析）を行っている。今回は、原産地遺跡である白滝遺跡群の資料に対し、こうした分析を行うことで、有茎尖頭器が使用された際にどのような破損が及び得るのかを検討した。結果として、帯広市出土資料を対象とした分析と同様に、茎部に非常に大きな力が加わることを指摘することができる。

### 4-3. 有茎尖頭器の製作技術と大きさについて（図3）

各遺跡の接合資料及び未成品と思われる資料を観察したところ、白滝遺跡群の有茎尖頭器には石核素材（非常に大きな両面調整石器）と剥片素材の二種類どちらかの手順を経由していることが分かった。有茎尖頭器の多様性はこうした有茎尖頭器の素材の差による可能性も指摘できる。今後の検討が必要にはなるが、従来の有茎尖頭器石器群を製作素材の異なる二種類の石器群として区分できる可能性がある。

### 4-4. 小型の有茎尖頭器について（図4）

従来の予定の資料の他にも、タチカルシュナイV遺跡と白滝第30地点遺跡の有茎尖頭器を実見した。これらの遺跡では、従来よりも非常に小型の有茎尖頭器とやや大型の有茎尖頭器が出土している。これらの小型の有茎尖頭器は大型の有茎尖頭器をリダクションしたものの可能性があり、有茎尖頭器のライフヒストリーについて迫れる可能性がある。

## 5. 成果のまとめと今後の予定

以上、本年度白滝遺跡群の資料を実見して得られた知見である。現在、成果を整理途中なので判然としていない部分が多いものの、国内でも類を見ない大規模遺跡である白滝遺跡群の資料の実見を通じて、非常に重要な知見を得ることができた。

また、4-3や4-4など、主要石器群の比較という本研究の目的からはやや外れたもの

となっていたが、有茎尖頭器研究において道内にとどまらない非常に重要な視点となり得る。

資料の膨大さ故、その全てを観察できたとは到底言えないが、本年度で得られた知見を基に今後も資料の調査及び成果の発表を行っていきたい。また、今後、学会及び学術雑誌への成果の発表を行う予定であるため、本報告書内ではその成果の全てを掲載できないことをご了承願いたい。

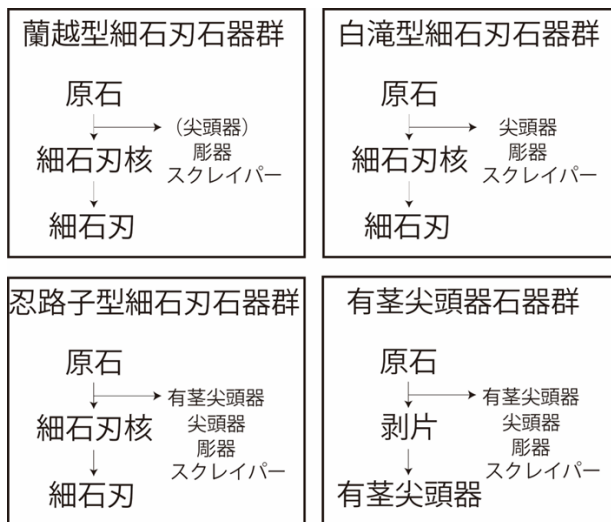


図1. 北海道石器群のイメージ

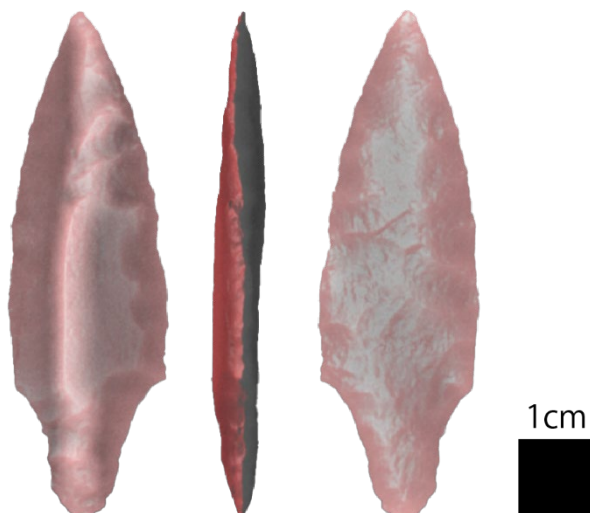
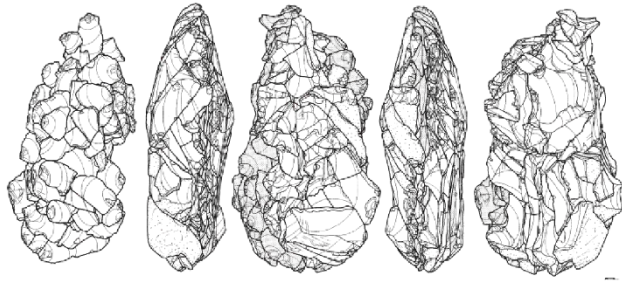
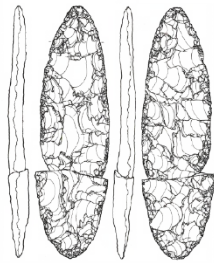


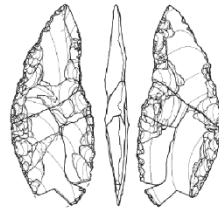
図2. 測定した3Dデータの一例



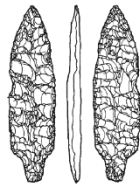
服部台 2 (sb23-31)



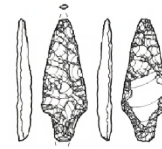
上白滝 2 (sb-13)



服部台 2 (sb23-31)



服部台 2 (sb38-40)



上白滝 2 (sb-1・2)

図3. 石核から製作する有茎尖頭器と剥片から製作する有茎尖頭器  
(図は各報告書から引用・大きさ不同)

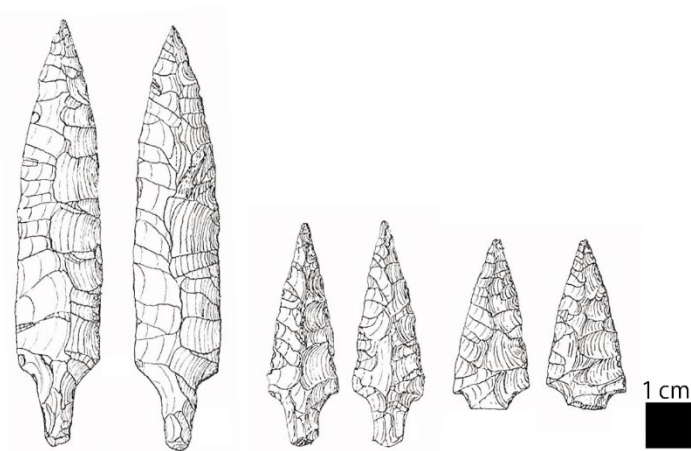


図4. 大きさの異なる有茎尖頭器 (図はタチカルシュナイV遺跡報告書から引用)